

『ミレイ会』を6月23日に開催

ミレイ会（原則60歳以上の退任役員などの有志の交流会。参加自由。幹事：山本守敏さん・増田治美さん）が4月の再開に続き、令和5年6月23日（金）に、巣鴨“たけやま”で開催しました。

平日の夕方からの開催で、スケジュールの確保が難しい皆さんもいらっしやると思います。今後とも、2か月に1回の目安で開催していきますので、年齢に関係なくお気軽にご参加下さい。



池袋御嶽神社七夕まつりへの協力

令和5年7月9日（日）、池袋御嶽神社で開催された『七夕まつり』に、子どもたちへのお菓子代の一部として、豊島区地域支部として協賛しました。当日は、天候にも恵まれ、例年以上にお子さん・家族連れが来場しており、久々の地域行事を楽しんでいました。



校友会支部長・幹事長・地域支部長・本部員懇談会&代議員総会

令和5年7月29日（土）に校友会校友会支部長・幹事長・地域支部長・本部員懇談会、翌7月30日（日）に校友会代議員総会が駿河台キャンパス・アカデミーホールで開催され、東京都北部支部の各地域支部長などが参加し、全国の校友会関係役員が参加し、懇親を深めました。

校友会代議員総会では、役員改選が行われ、北野大会長の2期目続投が承認されるとともに、東京都北部支部支部長の三森勲氏が副会長に就任しました。



豊島区地域支部年会費納入のお願い

校友の皆さまには、明治大学校友会豊島区地域支部の事業へのご協力御礼申し上げます。

豊島区地域支部の会報の制作・郵送などの事務費・運営経費については、会員の皆さまからの年会費により運営しています。2023年総会・懇親会時に受付させていただきましたとともに、2024年会報75号（新春）に振込用紙（振込手数料はかかりません）を同封させていただきますので、2023年～2024年の年会費の振込手続きいただければ幸いです。

■豊島区地域支部の活動に関する問い合わせ先：支部長 猪瀬典夫

携帯電話：090-5579-8856 E-mail アドレス：inose@macuass.co.jp

会報への投稿募集：学生時代の思い出や、「明治魂を伝える」、「お店・会社紹介」など、校友の皆さんの本会報への投稿を募集しています。よろしくお願い申し上げます。

豊島支部 NEWS

明治大学校友会豊島区地域支部

会報 第74号 2023年・秋

ホームページ <http://meiji-toshima.com>

フェイスブック <https://www.facebook.com/groups/210709222305133/>

豊島区地域支部『暑気払い』を開催



昨年11月の総会・懇親会、本年2月の初春交流会に続き、豊島区地域支部の三大大行事の一つである『暑気払い』を令和5年8月5日（土）に養老乃瀧ビルYRホールで開催しました。

7月に豊島区副区長に就任した天貝勝巳さん（1982年法卒）などからご挨拶いただき、楽しい会の幕開けとなりました。

暑気払い初参加者の自己紹介とともに、アトラクションでは、創設100年を迎える明治大学交響楽団・金管アンサンブルの演奏、東京都北部支部川部修典幹事長によるモルック体験、墨田区地域支部笹本和義幹事長による箱根駅伝応援旗争奪じゃんけん大会など、盛りだくさんの2時間半でした。

最後は、橋爪孝利幹事リーダーの校歌、中西大輔幹事による三本締めにより、11月11日（土）の総会・懇親会での再会を誓い、終演となりました。



明治魂を伝える！ 高桑光浩さん（1986年法学部卒／豊島区区民部長）

この度は、明治大学校友会豊島区地域支部会報に掲載の機会をいただきまして、ありがとうございます。

私は、北海道十勝の池田町という田舎町の出身です。進学は、学費が安い国立の北海道大学（北大）を第1志望、明治大学を第2志望としていました。

受験直前の1982年1月に、北島監督率いる明治大学と明治出身の松尾雄治選手が主力を務める新日鉄釜石との間で戦われたラグビー日本選手権を、たまたまテレビで見る機会がありました。負けはしましたが、その試合での「前へ」という明治魂に感銘を受けたことをよく覚えています。そのことだけが理由ではないと思いますが、私の気持ちの中で、第1志望の北大より明治大学のほうが魅力的に感じられるようになりました。

その気持ちがそうさせたのか、あるいは東京に対するあこがれがあったのかわかりませんが、親に無断で、補欠で合格した北大を辞退し、明治大学への進学を決めてしまいました。北大から補欠で合格した旨の電話が家にかかってきたのですが、電話に出た私は、その場で「北大には行きません」と伝えてしまったのです。

東京では、北海道出身者のための学生寮に入り、様々な大学の学生との交流を楽しみ、明大で親しくなった友人等との飲み会やアルバイト等に精を出して、学業のほうはあまり身を入れていませんでした。

そんな私が、2年生の時に司法試験の受験を決意し、当時、大学の記念館にあった駿台法科研究室という司法試験受験サークルに所属し、猛勉強(?)を始めました。卒業後もアルバイトで食いつなぎ窮乏生活に耐えながら、3年ほど浪人生活を送ったのでした。

このような合格するかどうかわからない（ほとんどの人が合格できない）司法試験地獄から救ってくれたのが豊島区役所で、1989年（平成元年）4月に25歳で豊島区役所に就職することができました。

司法試験をあきらめたことには後悔もあり、もっと続けていればよかったという気持ちも多少はありますが、まったく無駄な経験だったのかというと、そうでもないと思います。（「そういたい」というところでしょうか。）

例えば、仕事を進めるうえで、いろいろ困難なことがありましたが、司法試験をあきらめた時のように後悔したくないと思い、あきらめず取り組むことができたと思います。

豊島区役所では、先輩や同僚などの協力のおかげで、何とか職責を果たすことができているのかなと思います。加えて、現在、区民部では区民活動推進課、区民ひろば課、総合窓口課、税務課、国民健康保険課、高齢者医療年金課、東部区民事務所、西部区民事務所を所管しており、区民の皆様と直接接する機会が多く、地域活動団体や町会など、さまざまな場面で明治出身の方々お会いし、地域の校友の皆様のご協力に大いに助けられています。このようなご縁を大切に、まだ数年は豊島区でお世話になると思いますので、皆さん、今後とも、どうぞよろしく願いいたします。



地域活動を支える
区民活動推進課協働推進グループ職員と

お店紹介：福島家／福島真太郎さん（1991年政治経済学部卒）

福島家は、文久元年という江戸時代末期に創業し、ずっと巣鴨という土地で、和菓子を作り続けている老舗で、私が6代目の店主になります。店は、関東大震災や東京大空襲で何度か焼失して移転を繰り返してきましたが、現在の立地は、巣鴨駅を出た巣鴨駅前商店街アーケードのいちばん手前、とげぬき地蔵へ向かう人を最初に出迎えると同時に、地元の人たちが駅へ出入りする際に通りかかる場所でもあります。

伝統を守りつつ、新しい上生菓子のコンセプトに取り組みとともに、栃木県日光市にある『四代目徳次郎』さんの天然氷を使った新しいかき氷を商品化するなど、チャレンジし続けています。

今でこそ、店主としてこだわりを持ち、老舗を守り続けていますが、20代の頃は自分の好きなことをしたいとフランスへ行っていたこともあります。パリでアルバイトをしながら語学学校へ通ったり、サーカス学校を出てフランス各地を回って大道芸を披露したり、日本料理店を経営したり……そうして10年の月日を過ごしました。後継から逃げたんです。でも、30歳になってやっと家や親のことを考えるようになって、帰国して、父や店の人たちに頭を下げて、店に入ることにしました。

店に戻ってからは6代目として真摯に仕事に向き合ってきました。製菓学校には通ったけれど、美しくおいしい菓子を作るのはうちの職人の仕事。私にできるのは、職人が納得して使いたいと思える材料を選ぶことです。できるだけ農家さんの元へ足を運んで、どんな思いでどう育てているのかを聞き、味を確かめて仕入れるようにしています。それが、材料の仕入れや新しいメニューの開発につながっています。

天然氷についての話をするために、近所の小学校へ行くこともあります。SDGsの授業で、氷について講演したりしています。また、うちの店の説明にからめて巣鴨の歴史も話しています。子どもたちが自分の住んでいる街にもっと興味を持って誇りに感じてほしい。いつかこの街を離れることがあっても、自分の生まれ育った街をいいイメージで覚えていてほしいと思います。巣鴨がどんな街で、どんな成り立ちなのかも伝えていくことも、自分のライフワークになりつつあります。

店の外が賑やかなので目をやると、どこかへ実習に行くのか、小学生が列を成して歩いていて、こちらに手を振る子に、同じように手を振り返りながら、挨拶しながら通り過ぎていきます。日常のなかで当たり前のように存在する店かもしれませんが、代々守って受け継いできた技術があり、地元を活気づけたいという思いで取り組む挑戦があります。いつか、子どもたちもそれに気がつき、同じように大切に思ってくれる日がきっと来るに違いないと思っています。

そして、もうひとつ、大切にしているのが、海外からの職人志望者を受け入れること。「フランスから店に戻ったところに通っていた製菓学校とのつながりで、和菓子を勉強したいというフランス人を受け入れたことがあります。うちでしっかり勉強してくれたので、彼女はフランスに帰ってから和菓子店をオープンするまでになりました。それが前例となり、今でもそういう話があって。今は入社4年目になるフランス人女性がいますし、今後、さらにもうひとり受け入れる予定です。反抗期に習得したフランス語が無駄にならなくてよかった（笑）」

もちろん、和菓子店として代々守り続けてきた定番の和菓子も大切にしているし、お茶席や社寺への納品なども大事に受け継いでいます。「いつもの5つ包んでちょうだい」という常連さんもいれば「かき氷ってまだありますか」という若い男女もいて、興味津々に和菓子を眺め続ける海外からの観光客もいる。それが、今の福島家の姿です。校友の皆様、今後とも、よろしく願い申し上げます。

